

## 評価コメント2

関内 隆 (東北大学高等教育開発推進センター高等教育開発部長・教授)

はじめに、このような場でお話をするというチャンスを与えてくださった田中先生をはじめ、関係者の方々に御礼申し上げます。私自身の立場がどのようなものか考えてみると、同じような規模の大きな大学で、FD活動に関わっている立場から、京都大学の取り組みについてのコメントだと考えています。

一つだけお話しさせていただきたいことは、京都大学のセンターと東北大学のセンターは、だいぶ違うなど、感じていました。場合によっては、東北の事例の方がほかの大学の事例と似ているのではないかとということです。ということかということ、教養部解体のときに、各先生方が分属されて、教養部の担ってきた教育を一つの学部で継承するというのが、恐らく京都大学や広島大学です。それに対して、ほかの大学では、そのような学部ではなくて、教養教育であるとか、全学教育、あるいは共通教育といわれるものの企画実施について、学内センターが何らかの形で携わっているというケースが多いかと思えます。東北大学の場合もそうです。東北大学では、私たちは全学教育といいますが、全学教育の企画実施とFDをセンターと一緒に担うという立場にあるということです。そのような面から、東北大学の事例についても、後半部分で若干紹介させていただきたいと思えます。

最初にコメント報告の構成ですが、前半部分は、先ほど田中先生からお話があったような総括について、三つの部分に即して、私の方から簡単に率直な質問等をおつけてみます。それから、いろいろ確認をさせていただきたいと思えます。続いて後半部分で、それでは東北大学の場合、京都大学とどのように違うのか、若干説明をさせていただければと思えます (スライド No. 2 参照)。

FDに対する基本的な考え方や思いは、私たちも田中先生をはじめとする京都大学のセンターの考え方と同じくしています。ただし、まさに大学としてのローカリズムというのでしょうか、京都大学の個性と東北大学の個性とはだいぶ違います。従って、発現形態が微妙に違ってきているということかと思えます。それを踏まえて確認していくと、日本におけるFDというのは当然のことながら、啓蒙型から出発しなければならなかったということは、そのとおりです。それに対しての形骸化の問題に早くから警鐘を発して、相互研修型、あるいは相互啓蒙型の重要性を唱えてきて、見事に実践してきたのが京都大学の大きな功績だろうと思えます。それを私たちは学びつつ、その成果を取り入れていったのではないかとと思えます。

先ほどの田中先生のお話にもあったように、そこにはやはり大学教員への信頼というものがあるのだらうと思えます。決して、大学教員というものが、外からいろいろな形での指令を受けて動くものではないということだと思えます。そういう基本的な考え方で、田中先生がよく出される座標軸の縦軸に「イベント的」と「日常的」、横軸に「制度化」と「自己組織化」というものがあります。言ってみれば、FDを形骸化させるものではなくて、実質化へと、それから上からではなくて、相互啓蒙型、あるいは相互研修型のボトムアップ型へということです。私からの質問は、田中先生の理想として、日常的な自己組織化型 (第3類型) の相互研修型が挙げられていますが、しかし、それだけが相互研修志向なののでしょうか。第4類型の日常的な制度化型というものを、どんなイメージでとらえられているのかということをお聞きしたかったということです。

実は、東北大学で実際に行っていて、これからも継続しようと思っているものが、この第4類型です。日常的な制度化型の志向ということで、それは既にある教務系のシステムや制度、委員会などを活用しつつ、ボトムアップ、それから相互研修を目指そうとするFDを行っています。先ほど京都大学の経済学のカリキュラム再編成のお話をいただきましたが、まさにそれこそがFDではないかと私自身も考えています (スライド No. 3 参照)。

次に、2番目にお話になった相互研修型FDの組織化をめぐる最初の項目の、センターのFD活動についてです。取り組みとして公開授業検討会や、ウェブ公開授業等々をされていますが、全体として私たちが分からなかったのは、どのような所属の先生方が主に参加していたのか、また、それぞれについての自己評価はどうであったのか、先ほどウェブ公開授業はなかなかうまくいかないというお話を聞かせていただきましたが、そのあたりの問題です。それ

から、センターが行われたFD活動に対して、京都大学の先生方、あるいは部局は一体何を期待しているのだろうか、このあたりをセンターがどのように受け止めているか。もし可能であれば、お聞かせ願いたいと思います。

そもそも京都大学の先生方は、教育をめぐる問題について、何か問題を抱えて、ぜひこれを解決したいというようなものがあるのかということです。そのあたりはどうだろうかということです。東北大学は、これを意識した教員対象調査を行いました。そうすると、先生方は意外と、教育に対してはかなり熱心で、自分の授業に対して常に努力をしているという人が7～8割です。それをどの程度まで額面どおりに受け止めるかというのはまた別問題ですが、しかし一般的な問題よりは、例えばクラスサイズが違う中で、どのような授業を行えばいいとか、成績評価というものをどのように厳密に、公平に行えるかという授業実践に即した個別のかつ多様な課題について悩んでいるということが分かってきました(スライドNo.4参照)。

次に工学部との連携、組織化の全学への拡大についてですが、工学部対象の記名式の授業アンケートの取り組みは、非常に面白いと私は思いました。どちらかという、一種の学習ポートフォリオを作るようなイメージかなということも感じました。先ほどのお話ですと、これは4年間の取り組みなので、自己評価結果やカリキュラム改革は現在、構想中であるということ、一応理解できました。

それから各部局でのヒアリングについてですが、部局単位での自生的なFD活動を再確認できたということは、非常に大きな成果であったのではないかと私は思います。東北大学ではここまでやっていませんが、資料を見ながら、各部局でFD活動がどのように行われているかということは確認しています。そうすると、私たちがセンターとして、全学教育、教養教育を中心に行っている授業評価アンケートやFD活動を越えるというか、あるいは、それとは違う非常に面白い企画が各学部で行われていることに気が付きました。専門職大学院でも非常に面白い企画を行ってしまし、理系学部では演習や実習、講義等の形態別授業評価アンケートを作りながら、部局独自のものをやっていることを把握できました。全学共通教育のFDと京都大学のセンターは直接かかわらないと考えていいかどうか、もし直接責任がないとするとそこはやはり京都大学の特徴ではないかと思っています(スライドNo.5参照)。

組織化の拡大と「まとめ」についてです。田中先生のご報告にありましたが、大学間連携というものが非常に重要であると。しかし、やはり各大学の個性というか、あるいはローカリズム、ローカリティ、自生的な努力を前提に、この連携を組んでいかなければならないということは、そのとおりだと思います。FD戦略に関する情報の共有化やFDに関する調査研究というものが必要であること、また、これをさまざまなタイプでやっていく必要があるということは、そのとおりだと思います。

東北大学でも、平成17年度から3年間の特別教育研究経費を頂いて、スタンフォード大学との連携FDのパイロット事業を実施し、諸外国のFDネットワーク事情を調査してきました。明らかになったことはたくさんありますが、天野先生の紹介にあった通りポイントはキャリアステージに応じたFDが諸外国では行われているということです。それから、諸外国での大学が置かれている事情と大学教員の置かれている事情は、もちろん日本と違います。そのコンテクストを無視して、無理やり入れてきても難しいというあたりを中心に、われわれは考えていかなければならないのではないかと思います。

昨年9月の中教審の中間報告でも皆さまご承知のとおり、学士課程教育の再構築というようなことがうたわれています。そうすると、今までどうしてもFD活動は、個別の授業科目の方法というところに集中してきましたが、これからは教育内容や個別の授業科目を束ねた教育カリキュラム全体の成果をどのように検証していくかということ、FDがポイントを据えていかなければならないのではないかと思います。京都大学の場合、このあたりについての展望はどうかということをお聞きしたいと思います。以上、京都大学への質問という形でコメントをさせていただきました(スライドNo.6参照)。

ここからは時間の許す限り、東北大学でのFDについて簡単に紹介させていただきます。FDに対する基本的な考え方ということですが、教員が主体となるFD、つまり研修の客体というか、お客さまになるという教員では駄目だろうという考え方です。それから大学教員は、研究者であると同時に教育者であるという両方の顔を持ちます。研究者としての大学教員を大事にしたいということです。研究と教育を二律背反的に捉えずに、そのシナジー効果に期待したい。

それはどういうことかという、研究者としての教員というのは、もちろん自分の専門分野にかかわる授業科目を

持っているはずで、従って、担当授業科目が抱える具体的な課題から出発していきたくというのが基本方針です。教員のキャリアステージに基づいて、教員の多様で個別的なニーズに対応したFDを幾つかの類型に分けて実践する必要があるのではないかと考えています。当然のことながら、一大学ですべてやることは不可能です。従って、国内の地域的なFD連携や海外とのネットワーク形成が必要だろうとも考えています（スライドNo.7参照）。

取りあえず4類型という形で出しましたが、最初は新任教員向けのキャリア形成・能力開発のための出発点としての〔A〕転換教育型FDです。民間から大学教員になれる方は、とりわけ専門職大学院の場合には非常に多い状況です。大学の研究教育機関という職場としての特徴というものの、その中で教育の意味を知っていただく必要があるだろうと思います。

東北大学で重視しているのは〔B〕のタイプで、教育実践・問題解決型の1番目の類型です。先ほどお話ししたように、研究者としての大学教員の主体的な取り組みはどこから始まるかという、担当している授業科目に関する個別のニーズを持っていて、そこに何らかの課題を解決したいという意欲を持っているので、それに応えるFDでなくてはならないと考えています。

昨年度から取り組み始めたのが、授業実践記録というものです。これは授業評価アンケートに対して、教員側が意見を出すとともに、成績評価の分布図を公開しているので、教員自身の成績評価がその中でどのような位置にあるか、どのような基準と方法で成績を付けたかというのを総体的に総括しながら書いてもらうという各授業についての自己点検で、授業実践のエビデンスです。大変なものではなく、A4サイズで1枚です。ウェブ上にそのような書式があるので、それに対して入れてもらう。それを基に科目委員会の教員会議が最低年1回行われるので、そこでいろいろな情報交換を行ってもらいます。これこそが本当の意味でFDではないかと考えています。

それから、本学の特色ある授業として、平成18年度に特色GPを頂いた基礎ゼミの科目があります。毎年11月に次年度担当予定の先生方に来ていただいて、FDのワークショップを実施しています。先ほど田中先生のお話にもありましたが、参加強制や動員型のイベントというものを私たちも可能な限り回避したいと思っています。従って、参加者の部割割り当ては従来からやっていません。こちらでそのような案内を出して、あとは来ていただくだけ。それでもやはり関心のある先生方として、100名を越えて集まってくるということです（スライドNo.8参照）。

3番目の類型としては、個別授業科目の改善から、先ほども触れたカリキュラムの改善を展望する必要があるのではないかとことです。これらの授業科目をめぐる教員会議では、単なる授業方法や成績評価方法のみならず、授業の教育目標、また全学的なカリキュラムの中での位置付けにかかわる論議に波及する可能性が十分あります。私たちは個別の授業評価ではなくて、個別授業科目を束ねた科目群に対して4年生あるいは2年生がどのような評価をしているかという調査を学生対象に行いました。

そうすると、個別の授業科目のいわゆる授業評価アンケート結果と、4年生になった時点でそれらの科目に対する評価が違ってきていることを把握できました。やはり授業評価アンケートはある意味で短期的、一過性です。例えば1年生のときに、授業評価アンケートで、それほど評価が高くなかった科目群があります。しかし4年生になってみたら、その科目の有効性・有益性がかなり秀でていたというような状況があります。それらを踏まえると、個別授業科目のみならず、全体のカリキュラムの中での位置付けをめぐる議論が必要ではないか。つまり、大学の教育全体、特に学士課程教育と、その教育成果をどのように検証するかという課題とFDが連動していかなければならないのではないかと思います。

昨今、話題になっているカリキュラムマップの作成ということ自体が、FD活動そのものであるという山口大学や立命館大学の取り組みも、その代表例だと思います。問題は、各大学がどれぐらいのカリキュラムマップを作るのかということです。非常に詳細に作るのか、あるいはカリキュラムツリー程度で十分なのかというのは、各大学の判断だろうと思います。そのような意味で、個別授業科目を超えたカリキュラム全体の改善とFDとの連動が必要かと思えます（スライドNo.9参照）。

4番目の類型としては、田中先生が紹介された公開授業、あるいはeラーニングのための講習など、従来、行われていたさまざまなFDがあります。これはサービス機能型FDだろうと私自身は考えています。しかし、これを無視することはできないと思います。各先生方はキャリアに応じて、また担当クラスの特徴に即した非常に細かい要望を持っていますが、それに各個別の大学が対応するのではなくて、共通のニーズを整理分析しつつ大学間ネットワーク

の形成で対応していく必要があるのではないかと思います。

東北地区の大学間 FD 連携というものを想定しても、主要な各大学で得意分野があります。そのようなものを生かしたワークショップの開催、さらには情報の共有化というものが必要かと思います。これまで FD として、あまり取り上げてこなかった方向性として、各学問分野、例えば経済学教育や医学教育など、学会・協会での FD は非常に盛んで、やはりそれらとも連携しながら授業コンテンツを開発しなければならないということもあります。また、大学教員自体の研究、要するにアカデミック・プロフェッションの研究も FD 活動の基礎になるべきだろうと思います。さらに、先ほど天野先生のお話にもあったかと思いますが、とりわけ研究大学の場合は、大学院生向けの研究者養成型の FD は不可欠だろうとも考えています (スライド No. 10 参照)。

最後のまとめになります。恐らく基本的には京都大学のセンターの考え方と一致していると思いますが、私なりに別の言葉でいうと、各教員の抱える個別的課題、それから内発的な意欲に応えるような FD を今後、考えなければならぬと思います。各先生方は担当授業に即して、嫌々ながらではなく、自らが喜んでというか、先生方はまさに議論好きですから、その議論をしていただくような主体的に教育論議が行われるような場を設定していくことが、結果的に FD になります。FD というのはダイナミックなプロセスだと思います。要するに、場の設定だけでよとするのでは FD ではないと思うのです。

当然、参加強制は極力避けるべきですが、ただ、そのための条件があります。強制でなくても、FD に行ってみたいというような気分になってもらわなければなりません。そのためには大学、あるいは大学中枢部というのでしょうか、そこが教育活動に対する適切な評価を実施するというのが必要ではないかと考えています。そして、各大学の自生的な FD 活動を基礎に、経験豊富な大学の FD 活動蓄積を活かすような大学間の地域ネットワークが構築される必要が当然あるだろうと思います。

では、FD の最終目標は一体何だろうかということです。これは恐らく大学における教育の質の向上です。学生の身になって考えてみると、学生が行う学習活動の支援というものがまさに教育なので、その効果を向上させる。かつ、その効果、あるいは成果を検証していくということだと思います。それを考えると、FD が今後取り組むべき最大の課題、最大の難題といってもいいかもしれませんが、やはり教育の成果をいかに検証するかということではないかと考えています。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

(大塚) 関内先生、どうもありがとうございました。京大の GP の評価のみならず、対比する形で、東北大学の FD の具体的な取り組みを示してくださいましたので、私どもにもいろいろなヒントが得られました。

それでは続きまして、千葉大学の山内先生より評価コメントを頂きたいと思います。

## 外部評価コメント

東北大学高等教育開発推進センター  
関内 隆

1

## 報告の構成

- 京都大学の取組みと東北大学のFD
- 1 「相互研修型FD」とその「組織化」をめぐる
- 2 京都大学における相互研修型FDの組織化をめぐる
- 3 組織化への拡大と「まとめ」をめぐる
- 東北大学が目指すFDの基本理念と戦略
- 1 FDに対する基本的な考え方
- 2 FD活動の4類型とFDネットワーク
- おわりに

2

## 京都大学の取組みと東北大学のFD(1)

- 1 「相互研修型FD」とその「組織化」をめぐる
- キーワードは啓蒙型から相互研修型へ: 教員への信頼
- イベント的と日常的 (FDの形骸化と実質化)
- 制度化と自己組織化 (トップダウン型とボトムアップ型)
- 日常的・自己組織化型 = 相互研修型
  - 自己組織化のみが相互研修志向であろうか?
  - IV型 (日常的・制度化型) のイメージは?
- 東北大学FD = 敢えて言えば、日常的・制度化型を志向  
既存の教務系システム・制度を活用しつつボトムアップ・相互研修を目指すFD

3

## 京都大学の取組みと東北大学のFD(2)

- 2 京都大学における相互研修型FDの組織化をめぐる: (1) センターのFD活動
- FD活動の個々の取組み (公開授業・検討会、ネットの利用等) の対象となった教員の所属など属性は? またこれらの活動に関する自己評価の状況は?
- FD活動に対する大学内各教員の評価、センターに期待する要望等はどのようなものであろうか? 他方、京都大学の各教員が抱えている課題は何であらうか?
- 東北大学でFDに対する教員意識調査を実施し、FDに教員が何を求め、各教員がどのような課題を抱えているかについて把握する取り組みを行った (回収率: 51.5%)。
- FD活動全体の成果と今後取り組むべき課題をクリアに。

4

## 京都大学の取組みと東北大学のFD(3)

- 2 京都大学における相互研修型FDの組織化をめぐる: (2) 工学部との連携、(3) 組織化の全学への拡大
- 工学部学生対象の特色ある授業アンケートの取り組みに対する工学部ならびに教員全体としての自己評価は?
- 授業アンケート結果を受けて実施されたカリキュラム改革の具体的な内容は?
- 教育改善・FDについての各部局ヒアリング: 部局単位での自発的なFD活動の再確認 [非常に重要な取組み]
- 京大方式のFD組織化の内容をより詳しくお聞かせ下さい。
- 全学共通教育のFDとセンターとの関わりは? (東北大学では全学教育FDをセンターが主催 + 各部局の自発的FD)

5

## 京都大学の取組みと東北大学のFD(4)

- 3 組織化の拡大へと「まとめ」をめぐる
- 大学間連携の重要性: 個別大学の自発的努力を前提にした連携 = Locality を踏まえた大学間連携の意義
- FD戦略に関する情報の共有化、FDに関する調査研究等の連携など、様々なタイプのFDネットワーク形成が重要。
- 東北大学で米、英、加、豪のFDネットワーク事情の調査を実施し、大学院生・新任教員対象等、キャリアステージに即した多彩なFDと大学連携FD組織の活動を再確認。
- 今後は各大学で、個別の授業方法とともに教育内容・教育の成果検証に即したFD活動が、「学士課程教育の再構築」にとって重要となるのではないだろうか?
- FDをカリキュラム改善や教育の成果検証へ繋ぐ展望は?

6

### 東北大学が目指すFDの基本理念と戦略(1)

- (1) FDに対する基本的な考え方
- 大学教員が研修の客体となるのではなく、「教員が主体となるFD」
- 教員は研究者と教育者の両方の顔を持ち、それを二律背反的に捉えず、むしろ研究と教育のシナジーに期待する。
- 研究者による教育実践(=担当授業科目)が抱える課題から出発
- 教員のキャリアステージに基づいて、教員の多様で個別的なニーズに対応したFDを類型別に実践する。
- FD活動においては学内各部署との連携、国内地域連携、海外連携のネットワーク形成で情報の共有化と、共同研究、イベント共催を実施する。

7

### 東北大学が目指すFDの基本理念と戦略(2)

- (2) FD活動の4類型
- [A]新任教員向け「転換教育型」FD  
キャリア形成・能力開発の出発点としての新任教員研修
- [B]「教育実践・問題解決型(I)」FD  
・授業担当教員の個別ニーズ・内発的意欲に応えるFD  
・「授業実践記録」に基づく科目委員会FD:  
授業実践記録: 授業実践のエビデンス(自己点検評価)  
担当教員会議で授業評価アンケートへの意見、成績評価分布図公開に基づく情報交換=「日常的・制度化型」  
・全学教育「基礎ゼミ」担当教員対象のFD・ワークショップの実施: 参加動員なしで約100名が出席

8

### 東北大学が目指すFDの基本理念と戦略(3)

- (3) FD活動の4類型(続き)
- [C]「教育実践・問題解決型(II)」FD:[B]の発展形態  
・個別授業科目の改善からカリキュラムの改善を展望  
・担当教員会議でのFDは各授業科目の教育目標、全学的カリキュラムの中での位置づけに関わる論議に波及。  
・大学の教育全体、特に学士課程教育とその教育成果をどのように検証するかという課題との運動へ。  
・カリキュラムポリシーの再確認作業、何らかの「カリキュラムマップ」作成のプロセス自体がFD活動そのものに他ならない(山口大学、立命館大学の取組み)  
・各大学FDセンターとカリキュラム編成審議機関との関係が重要。(センターが全学共通教育と関わる場合が多い)

9

### 東北大学が目指すFDの基本理念と戦略(4)

- (4) FD活動の4類型(続き)とFDネットワーク
- [D]「サービス機能型」FDと大学間ネットワーク  
・各教員が抱える多様な個別な課題・ニーズに応えるためのワークショップ等が不可欠である。  
・イベント動員型ではなく、米国型の「サービス機能」FDとして、この面で大学間ネットワークの形成が重要。  
・東北地区の地域間連携を想定すると、主要な各大学の得意分野を活かしたワークショップ開催、情報共有化等。  
・学協会との連携で学問分野に即した授業コンテンツ開発。  
・大学教員それぞれ自体の研究もFD活動の基礎となるべき。  
・研究大学は大学院生向け「研究者養成型」FDも責務。

10

### おわりに

- 各教員が抱える個別課題・内発的意欲に応えるFDを
- 担当授業に即して教員が主体的に教育論議を行える場の設定(=FD)を
- 参加強制のFDは逆効果: そのためには、教育活動に対する大学としての適切な評価実施が前提
- 各大学の個性に即した自発的なFD活動を基礎に、経験豊富な大学のFD活動蓄積を活かす大学間連携と協働⇒大学間の地域FDネットワークの構築へ
- FDの最終目標は何か?: 大学における教育の質の向上
- 学生の学習活動支援の効果向上とその成果検証
- FDが今後取り組むべき最大の課題は、学士課程教育において「教育の成果」を如何に検証するか。

11

### 参考資料

下記はすべて東北大学高等教育開発推進センター編の刊行物

- 『全学教育カリキュラムと授業環境に関するアンケート調査実施報告書-東北大学の全学教育に対する学生と教員の評価-』(2005年3月)
- 『「学生による授業評価」実施状況の調査と新たな「授業評価改善システム」構築に向けて-報告と提言-』(2006年3月)
- 『国際連携を活かした高等教育システムの構築: 中間報告書』(2006年3月)
- 『東北大学のFD実施状況と展望』(2007年3月)
- 『国際連携を活かした高等教育システムの構築: 中間報告書II』(2007年3月)
- 『「学びの転換」を楽しむ-東北大学基礎ゼミ事例集-』(東北大学出版会、2007年3月)
- 『大学における初年次教育と「学びの転換」』(東北大学出版会、2007年3月)
- 『大学における「学びの転換」とは何か』(東北大学出版会、2008年3月)
- 『研究・教育のシナジーとFDの将来』(東北大学出版会、2008年3月)

12

